SEMMOTO

NEWSLETTER

2022.11.22. No. 7

CONTENTS

- 2022年度新規奨学生認定授与式
- 2022年度新型コロナウイルス特別給付奨学金の募集状況
- リーダーシップ交流会
- 2022年度9月奨学生レポート

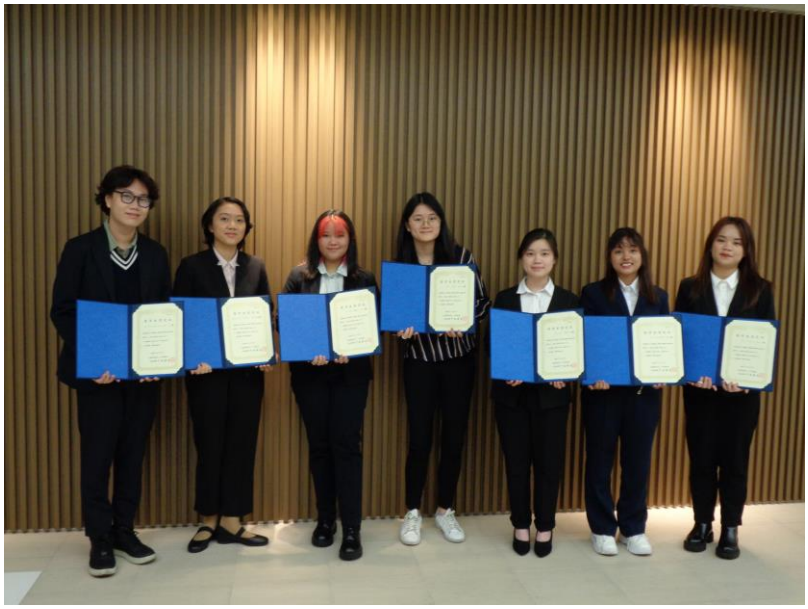
2022年度新規奨学生認定証授与式にて

公益財団法人
千本財団

Frances and Sachio Semmoto
Foundation

■2022年度新規奨学生認定証授与式

2022年11月13日（日）に2022年度の新規奨学生認定証授与式を都内会場にて開催しました。認定証授与式には、新たに認定された7名の奨学生の他、千本代表理事、小林理事、事務局スタッフ2名が参加しました。認定証授与式の後には感染対策を施した状態で懇親会を開催し、出席者それぞれが自己紹介を行い英語と日本語を交えながら歓談しました。また、当財団として初めてミャンマー出身の学生を認定しました。



2022年度　新型コロナウイルス特別給付金　受給者7名

Le Duc Nhat Minh（写真左端）
上智大学　Faculty of Economics, Department of Economics　2年生、ベトナム出身

Eugenia Puspa Pitaloka（写真左から2番目）
上智大学　Faculty of Liberal Arts, Department of Liberal Arts, Comparative Culture Major
2年生、インドネシア出身

Aalia Larasati Shafira（写真左から3番目）
北海道大学　現代日本学プログラム課程
2年生、インドネシア出身

Loh Wen Wei（写真中央）
名古屋大学　School of Science, Department of Biological Science　3年生、マレーシア出身

Sherly Nathania（写真右から3番目）
東北大学　農学部　生物生産科学科　3年生
インドネシア出身

Myat Thinzar Zan（写真右から2番目）
立命館大学　College of Policy Science, Community and Regional Policy Studies Major (CRPS)　2年生、ミャンマー出身

Le Thuy Trang（写真右端）
上智大学　Faculty of Liberal Arts, Department of Liberal Arts　2年生、ベトナム出身

千本代表理事の挨拶

認定証の授与

懇親会の様子（1）

懇親会の様子（2）

懇親会の様子（3）

懇親会の様子（4）

■2022年度新型コロナウイルス特別給付奨学金の募集状況

例年、当財団では指定の日本語学校に所属し、翌年4月より日本の四年制大学への進学を目指す留学生を募集してまいりました。しかし、本年度は新型コロナウイルスの感染拡大状況から、日本語学校からの募集が困難であり、日本の大学に合格したのにもかかわらず半年以上日本へ入国することができなかった留学生を優先して支援する方針となりました。

そのため、本年度は1年間のみの給付支援となり、指定25大学に所属する2年生および3年生を対象として新たな奨学生を募集し、募集状況は下記の通りとなりました。

- 書類応募者数：26名（うち、男性11名、女性13名、不明2名（エッセイのみ提出））
- 出身国

出身国	男性		女性		合計
	書類合格者	書類不合格者	書類合格者	書類不合格者	
インドネシア	0	6	3	2	11
ベトナム	1	1	2	2	6
タイ	0	2	1	1	4
マレーシア	0	1	1	0	2
ミャンマー	0	0	1	0	1
合計	1	10	8	5	24

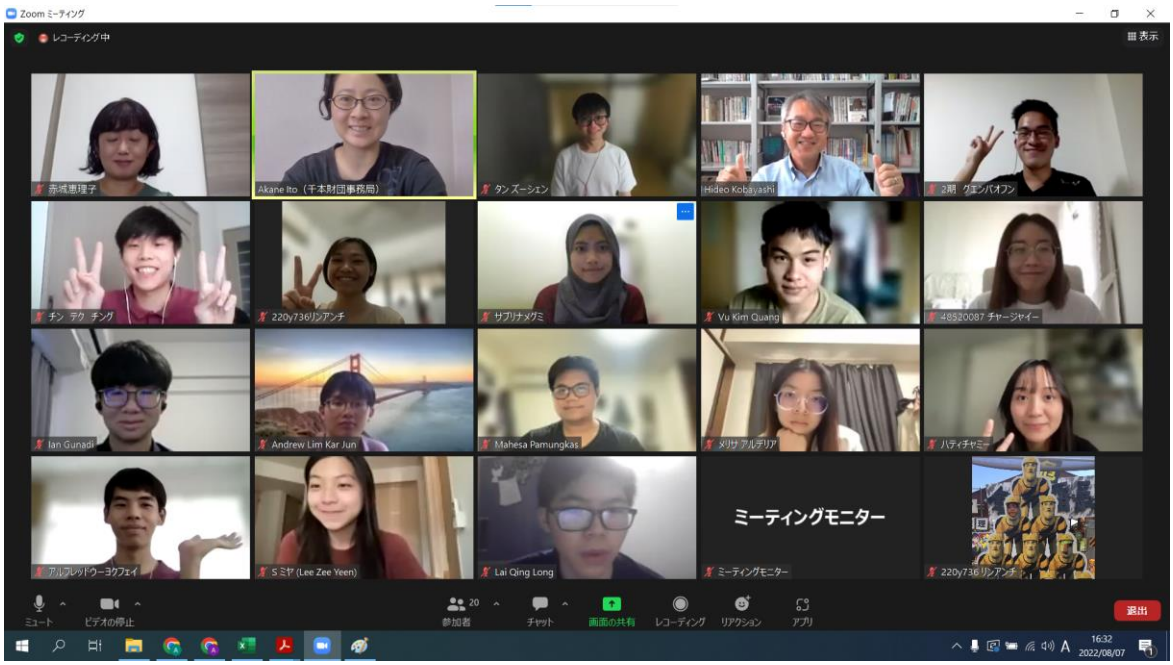
※　その他エッセイのみ提出（性別不明）：ベトナム1名、ミャンマー1名

- 出願のあった大学一覧（対象大学25大学、出願のあった大学11大学）

大学名	書類合格者	書類不合格者	合計
北海道	1	1	2
東北	1	3	4
東京	0	1	1
慶応	1	0	1
上智	3	2	5
中央	0	1	1
早稲田	1	3	4
名古屋	1	1	2
同志社	0	1	1
立命館	1	1	2
九州	0	3	3
合計	9	17	26

■リーダーシップ交流会

2022年8月7日（日）13:30～16:00に奨学生全員を招待し、リーダーシップを学び、参加者全員でリーダシップについて考える交流会をオンラインで開催しました。初めに当財団の理事であり、多摩大学の経営情報学部の教授である小林英夫氏にリーダシップの理論について講義をしていただき、中盤はリーダーシップスタイルの自己分析を通じてマネジリアル・グリッドについて学びました。最後に、「シェルターへの退避」というグループワークを行い、２つのグループに分かれ課題に取り組みました。



□リーダーシップ交流会　感想

SABRINA MEGUMI AHMAD（インドネシア）
神奈川大学　理学部　数理・物理学科　４年

私は何度かリーダーシップに関する講演会など に参加したことがありますが、もちろんどれも対面上で行われたため、オンライン上での交流会を新鮮に感じました。 リーダーシップスタイルの自己分析の結果も予想外で興味深かったです。小林先生が伝えた通り自己分析であるため、「自分はどうだろうか」だけではなく「自分はどうなりたいか」という理想が少なからず混ざって出た結果だろうと思いました。 その他、他の奨学生とは軽い雑談しか交えたことがなかったため、シェルター避難のディスカッションで、それぞれがどのように意見を主張するのかなど皆さんの新しい場面を見れました。 「一人でもメンバーが違えば、私が向こうのチーム居たら、ディスカッションの結果も変わってくるだろう」と思いましたが、両チームとも同じ答えを出して驚きました。出身国や文化、宗教観など様々ですが、広く見れば全員東南アジア人であるため共通している考えがあるということに納得しました。

TAN ZU SHENG （マレーシア）
山梨大学　工学部　コンピュータ理工学科　4 年

少しだけですが、小林さんと千本さんの話について聞けて良かったと思います。また、リーダーというものについてもいろいろ学べて、将来自分がリーダーになるとしたら、どのようなリーダーになるかという理想像が描けたのではないかと思います。そして、最後のグループディスカッションで一つのテーマをめぐって議論して、自分の意見を交わし合い、結論を導き出すのが面白かったと思います。就活において、選考でグループディスカッションをする会社が結構あるので、大手会社への入社を希望している奨学生にとっては良い勉強になったのではないかと思います。

VU KIM QUANG（ベトナム）
東京理科大学　工学部　機械工学科　4 年

他の奨学生と久々に交流できるイベントに参加できて楽しいと感じました。また、交流会の内容は自分の将来の起業の目的に大きく関係するので参加できてよかったと思います。起業するためにはリーダーシップ以外も必要とされる要素が山ほどあると思いますが、今回の交流会に参加することで、人を、ましてや組織を引っ張る人間になるためには自分の経験の不足さについて少しでも具体的に分かるようになりました。ただ皆の意見をまとめ、いいと思う案を出すことでグループをよくすることはできないことが分かりました。このことについてもっと考えたいと思います。

CHEAH JIA YI（マレーシア）
東京農業大学　生命科学部　分子生命化学科　3 年

自分の日々の生活の中でアルバイトなどを通じて違うスタイルのリーダーシップを経験しています。しかしその違いを個人としてしか感じることができなくて、環境もほぼ変わっていないので、それぞれのスタイルにはどのようないい点があったかを感じることが出来ませんでした。この交流会で必ずしも一つのスタイルが一番いいということではなく、違う組織や状況においてそれに適したスタイルがあることを知ってとても面白かったと思います。また、最後にみんなとグループでディスカッションをして、違う意見を最後一つにまとめることができ、すごくいい経験になったと思います。

LIM AN QI（マレーシア）
京都精華大学　マンガ学部　アニメーション学科　3 年

今回の研修会ではリーダーのタイプをたくさん紹介していただいた上に、自分のタイプも見つけることができ、それについてよく知ることができたため、とても勉強になり、ありがたく思っています。小林理事の説明が詳しくて例もたくさんありましたので、大変分かりやすく、楽しく聴講させていただきました。最後に用意されていたワークショップも面白かったため、しばらく時間が経ちましたがその12人のことはまだ頭の中に残っています。この研修会を開いていただき、誠にありがとうございました。またこのような機会があれば是非参加させていただきます。

NGUYEN BAO HUNG（ベトナム）
同志社大学　商学部　商学科　３年

今の学生生活では、グループで行動してリーダーシップが必要となる場面が非常に多いです。研修会で学んだことをゼミの研究とアルバイトに活かしたいと考えています。　研究が行き詰った時、班長を務めていないものの、私が率先して他のメンバーと話し合いながら新しい方向性を見つけたこともあります。研究を進めると、このようなことが多く発生すると思います。その時、どれが効果が最も高いリーダーのタイプかを考えて判断し、場面と他のメンバーの状況に応じて自分のタイプを変えた方がいいでしょう。

また、アルバイトで働くときもリーダーシップは不可欠です。私が一人で頑張るより、他の従業員に仕事のやりがいを感じてもらい、長く働いてもらうことは店の安定的な成長に繋がると思います。しかし、それは簡単なことではありません。店で働いている従業員は人によって性格、仕事の経験などが異なります。そのため、誰に対しても１つのリーダーのタイプを維持せず、それを柔軟に変更して効果を高めていきたいと考えています。

MELLISA ARDELIA（インドネシア）
東京理科大学　理学部第一部　化学科　３年

リーダーシップスタイルには最も良いスタイルがあるとは言われているものの、実際には場合によって適切なスタイルが変わってきます。答えは必ずしも一つだけに絞られてはいません。このことを念頭に置きながら、頑固にならず他のオプションもあること、他人の意見にもより耳を傾けることを心掛けます。また、当たり前ですが、自己分析と他人による分析では結果が違ってもおかしくありません。この点により注意しながら自分の行動を日々見直していきたいと思います。自分の中を見ながら、周りの行動、流れ、もよく観察することを心がけていきます。これをやっていく内に私個人の持論も形付けられていくのではないかと思います。

文系の研究は理系のと大いに違うとずっと思っていましたが、似ている部分も多々あることを学びました。例えば高い専門性を持ち、言葉に重みのある方々の異なる発言で複数の理論が同時に存在し、更なる研究で新しい視点、理論が出てくるところは共通していました。異なっているのは理論の選抜、証明にあるのではないかと思います。この文系における研究に触れるチャンスは新鮮で面白かったです。

HA THI TRA MY（ベトナム）
東洋大学　経済学部　国際経済学科　２年

常に変化しているこの世界ではリーダーシップが重要なものだと考えています。どう発揮すれば良いか真剣に考えていきたいです。マネジリアル・グリッドで自己評価した結果、私のリーダーシップスタイルは5・5型です。それは業績達成と人の気持ちへの配慮をバランスよく保つスタイルです。自分の行動スタイルが分かり、今後もバイトや大学の活動などでそれを生かしたいです。特に、バイト先でリーダーとして働いているので、交流会で学んだことが非常に役立つと思います。また、状況に応じて行動を変える必要があるので、他のスタイルを参考にして、仕事、環境などに合わせて行動をとるようにします。さらに、自分のやる気をうまく調整するため、チームメンバーのやる気を引き出すため、普段から観察する必要があります。人によってやりがいや趣味などがさまざまなので、チーム全体を把握することで、組織うまく統率できると考えています。これからは様々な活動でリーダーとしてチームを率いて、経験を積みたいと思います。

LEON ADITYO HARTANTO（インドネシア）
明治大学　理工学部　応用化学科　２年

リーダーは生まれつきの能力ではなく、誰でもリーダーになれるが、いいリーダーの素質を学ばなければいけない。リーダーの素質を学んだ。いくつかのアメリカの大学ではリーダーシップの研究の結果が出された。リーダーシップやリーダーの種類を学んだあとマネジリアルグリッドを使用し自己分析を行った。その結果による7つのリーダーシップ型の解析を行った。最も重要な結論は各リーダーシップスタイルはそれぞれの美点と欠点があり、うまく使い分けることが大事だと思う。そのあとシェルター退避のシミュレーションを行い、結果発表が行われた。その後、やる気を導くセッションが始まって、リーダーの持論について説明していただいた。松下幸之助氏と千本倖生氏のリーダーの持論を学び、全体のミーティングが終了した。

マネジメントグリッド、様々な自今分析のツールを使用し、どんな場面でもいいリーダーになりたいと思う。Jack Welchの４E、松下氏と千本氏の持論を自分のものにして、生き方の基本として利用したいと思う。私はMBTIの自己診断を受け、自分の性格など把握しているが、やはり自分なりのリーダーになるには努力が必要だと思う。このリーダーシップ研究に通して、改善すべきところを見つけたので、それに向けて努力しながら、様々な人と出会い、自分の視野を広げていきたいと思う。これからはより良いリーダーになって、他人だけではなく、自分自身をより良い道に導くことが一つの目標となる。

MAHESA PAMUNGKAS SUGIHARTO（インドネシア）
明治大学　経営学部　経営学科　２年

とても良かったと思います。実は交流会で学んだものは大学の1年生で経営心理学という授業で学習したのですが、今回の交流会は復習になりました。実践の問題もかなり興味深かったと思います。こんなに勝手に命をかけて決めていいのかとか考えながら、シェルターに入れて欲しくない人を選択しました。またこのような交流会があれば嬉しいなと思います。

ALFRED NGU YOK FEI（マレーシア）
法政大学　生命科学部　応用植物科学科　２年

大学の色々な授業でクラスメートとディスカッションをしています。確かに初対面の人とのディスカッションをすると意見が言いづらくなることもあったり、自身の日本語力の限界によって思う通りにうまく発言できないことがあったりします。また、周りに受けいれてもらうために意見を引き込めてしまい、発言しなくなる経験もたくさんあると私は実感しています。今回の交流会から色々気づきました。私が意見をうまく言えなかったのは前述した言語の壁などの要因よりも、むしろ自身の悪い癖による問題ではないかと考え始めました。このように自分の意見を堂々と言えないのはディスカッションでの成長を邪魔するだけではなく、考えていることすら言えない悔しさを毎回感じています。 将来は就職をし、業務に関するディスカッションは避けられない仕事の一部になるでしょう。このような将来に向けて準備する最も良いタイミングは今だと感じています。よりディスカッションの能力を上達させるために、授業のディスカッションで堂々と発言したり、グループメンバーの意見の理由をちゃんと深掘りするような姿勢に変えます。

NATHANAEL IAN GUNADI（インドネシア）
青山学院大学　理工学部　情報テクノロジー学科　１年

対面でできなくてちょっと残念だが、リーダーシップについていろいろ学ぶことができた。求められるリーダーは状況によって変わるというのが特に興味深かった。

もし私がリーダーになるとしたら、メンバーの期待や状況についてよくコミュニケーションをとることにする。最近やっている仕事の意味がないと感じやめてしまう社員も増えているという話をよく聞く。それがその社員たちを担当しているリーダーにも責任があると思う。何のためにこの仕事をやっているか、どうしてこのやり方で仕事をするのかこれについて考えてメンバーに教えるのがリーダーとしての任務だと思う。そして、部下に比べて専門的な知識がなくても、職場に対する部下の不満を聞いて相談するのがリーダーとしての役割を果たすためのいい方法だと思う。

LAI QING LONG（マレーシア）
東洋大学　国際学部　国際地域学科　１年

説明がとても面白かったので、3時間も経ったとはいえ、全然長く感じたりしませんでした。今回の説明会を経て、私のリーダーシップへの理解がより深まりました。千本さんの経歴も心に触れました。また、最後でみんなで議論するというグループワークもとても面白かったです。

分析によると、私は日和見タイプだったので、今後はより関心を持って周囲の人に接したいです。私は今まで大抵利益を考えてから行動していました。また、積極的に議論に参加したりしません。ですから、これからは積極的に議論に参加し、周りの人といい関係を築いていきたいです。このような考えはは私の今後のグループワークにとても役立つと思います。また、具体的な改善方法も学んだので、うまく自分の欠点を改善できれば、将来社会に出るときより楽になると思います。

ANDREW LIM KAR JUN（マレーシア）
山形大学　工学部　情報・エレクトロニクス学科　１年

研修会のアンケート調査により、自分の性格が明らかになったことがよかったと思います。また、最後にグループを分けて皆で一緒に話し合うことも面白かったです。異なる意見がぶつかり合い、私にとって素晴らしい経験でした。次回もぜひ参加させていただきたいです。

LEE ZEE YEEN（マレーシア）
長崎大学　多文化社会学部　多文化社会学科　１年

最近の自分はずっと自分のコンフォートゾーンにいて、適当でいい、最低基準を満たしたらいいという考えで生きていた。小林さんのように、11年間続いている安定した状態から抜け出すのは自分にとって難しいことだった。また、行動スタイルの自己評価で、自分の結果は中道型だった。やはり、さらに良くしていくことよりも、現状維持の方が好きというのが自分である。しかし、私はこれから少しずつ変わる勇気を蓄えたいと思うようになった。私はいつも知らぬうちに恐怖心を持っている。変わって人生が狂ったらどうしようという考えで、たくさんいい機会を逃してしまった。大学に入った後で確かに昔より色々なことに挑戦してみたけれど、心の中では不安とストレスがずっと解消されずにいる。しかし、小林さんは34歳で人生を変える判断をしたことに感心したので、私はこれから変わる勇気を持つために頑張りたいと思う。

■2022年度９月奨学生レポート

『まだ間に合う 元駐米大使の置き土産（藤﨑一郎著）』の読書感想文

SABRINA MEGUMI AHMAD（インドネシア）
神奈川大学　理学部　数理・物理学科　４年

「まだ間に合う」はすごく魅力的な本で読めて良かったです。内容も濃くて時間をかけて読みました。外交官、大使という仕事は自分と全く別の世界にある仕事のように思ってたので、どのような人物と関わったのかや、外交官ならではの経験を知れてよかったです。（実際に存じあげている日本の政治家は多くありませんが、知っている名前の人が登場すると、やはり「凄い、あの人とも関わりがあるんだ」と感心しました。）

私の母国インドネシアでの出来事にも触れてくださって、私もまだ生まれてない頃の母国の状況を新しい視点から知れて嬉しかったです。そして外交官という立場をそばにおいても、人生の大先輩という立場から大きなアドバイスをもらった気持ちになりました。

「自分の将来を考えよう」「学生時代を無駄に過ごさない」「英語を磨こう」など一見どれも当たり前なアドバイスですが、ただ理解すること、心にとめる事と、実際行動に出して実行することの間には大きい壁があるように思います。言葉にできない漠然とした不安や具体的にどうすればいいだろうなどの疑問、頭ではわかっているけど行動に出せない、と思うような悩み事にも適切なアドバイスをもらえました。外交官時代のエピソードはもちろん面白かったのですが、個人的に印象的だった項目は「学生のアイウエオ」と「社会人のアイウエオ」でした。「学生」「社会人」と分けられていていますが、どちらも今も将来も年齢関係なく念頭に置いて日々を過ごすことを心掛けていきたいと思います。

TAN ZU SHENG （マレーシア）
山梨大学　工学部　コンピュータ理工学科　４年

学生時代の部分では、神は不公平ではあるが、一つだけ「神は誰にも一回の人生しか与えていない」という点では公平であると語っています。私は確かにそうだと思いました。私の場合では，外国人として日本に留学し、日本人と比べたら日本語力が低く、就活では不利な立場にあるため、「神は不公平だ」という風にもとらえられるでしょう。しかし、英語がよく使われる国に生まれたがため、日本人と比べて英語力が高く、日本人にとってはそれが「不公平」でしょう。しかし，この本に書かれた通り、何事も「自分の尺度で考える」ことが大事です。そのため、他人と同じやり方ではなく、自分が何ができるかなどを考え、自分なりのやり方でやり遂げることが大事だと思います。

社会人の部分では、就職にあたってためになるアドバイスが多く書かれていて、その中で特に「人が言うからではなく、自分で考え直す」ということに共感しています。むやみに信じるのではなく、なぜそのような結果に至ったかを自分なりに考えたうえで、判断することが重要だと思います。また、雨が降る可能性がゼロではないため傘を用意し、結果的に雨が降ったため傘を用意して正解だったという部分が面白く感じました。備えあれば憂いなしということで、確かに、可能性がゼロではない限り、万が一に備えて対策を練るべきだと思います。

国際社会の部分では、主にグローバルな舞台での立ち回りに関するアドバイスが多く書かれています。そのうちの「会議での発言」というところで、社会人部分でもよく挙げられていたこと、要点を絞り出し、話したいことを簡潔に話すことが重要だと書かれています。私自身は何かを話しているときは結構長く喋ってしまうため、私にとって非常に耳が痛い話です。ですので，書かれているアドバイスを活かして、簡潔に物事を話せるように心がけたいと思います。

VU KIM QUANG（ベトナム）
東京理科大学　工学部　機械工学科　4 年

藤崎さんの本は人生で身に付けた方がいい心構えやスキルがたくさん述べられました。しかし、そのまま述べただけではなく、「はじめに」の通り、藤崎さんの体験談も一緒に述べられています。そのため、なぜこう言っているのかよくわかることができました。自分も藤崎さんと同じく、走りながら考えるタイプなので、藤崎さんと同じミスを起こしたことが多少あり、本の内容は自分へのアドバイスが多いように思います。特に自分の中で印象的だったのは新人が思っている以上にスタート時点から上の人がよく見ていることです。自分の中では、仕事を始めたばかりの時に研修時期があり、この時期が終わって、ある程度の勤務経験があってから初めて評価されるようになり、早くても仕事が正式に始まる頃だと思っていた。しがし、「9. 初陣でのつまづき」とを通してその考えがあまり良くないということが分かりました。確かに仕事を始めたばかりの頃にはスキルも経験もないのですが、入念にチェックし、前の担当や先輩に積極的に聞くことで仕事の流れを掴むことができ、ミスを避けることが可能です。そうすると上司の評価が大変良くなることが分かりました。これは仕事だけではなく、何事に対しても確認、事前調べ、準備が非常に大事であり、本番の結果はそれで決まるからです。

CHEAH JIA YI（マレーシア）
東京農業大学　生命科学部　分子生命化学科　3 年

藤崎一郎氏の本を読み、貴重なアドバイスをたくさんいただきました。自分が将来どのようなことをしたいかは決まったものの、時々迷います。本の中に書かれていた「やりたいことが固まったとき、道が閉ざされていないように」の言葉に目がひかれました。将来の道をより広くするために、自分の価値をどのように上げていくべきかを考え直すきっかけになりました。学生へのアドバイスで「役に立つ勉強は」について述べていましたように今ではどの業界にもコンピューターが必須です。私は基本のワードやエクセルだけでは足りなくなっていると思っているので自分もこれから重要になるコーディングなどについて勉強したいと思います。また、すごく驚いたアドバイスは「パッと見てわかりやすい資料をつくってはダメだ」というアドバイスです。小学校から資料は簡単でわかりやすくしろと教わってきましたが、それでは相手の興味を引くことが出来ないと気付きませんでした。これからはその点を頭に入れて発表などの資料に活用したいと思います。藤崎一郎氏の本では自分の経験やミスを色々述べていました、それは学生時代だけでなく、将来にも役に立つアドバイスで大変参考になりました。

MELLISA ARDELIA（インドネシア）
東京理科大学　理学部第一部　化学科　3 年

本には若者へのアドバイスがたくさん詰められていた。本のタイトルにもなっている、「まだ間に合う」という類の言葉が何度も繰り返され、若者へのアドバイスだと言っているが、実は少し上の年代へのメッセージもたくさん含まれているように思える。上の年代へのちょっとした批判、会社の取締役について、海外赴任をさせられる人の会社内の位置付けや英語教員を留学させる逆ジェットなどといった若い世代にはどうしようもない事柄なども書いてあった。本当に日本を変えるにはすでに定着している古い考え方を置き換えるべきだという意見であるからなのだろうか。書き方からしても、若い世代に向けて話しているようにあまり見えなかった。著者は若い世代へのアドバイスを書きつつ、上の世代も本の対象としていると思われる。

学生時代を満喫する余裕がないというような厳しいことを言っているが、優秀ではない人の立場に立って、現実的に話しているのは多くの人にとってはよりためになるのではないかと思う。世の中には優秀で特別な才能を有する人物の道の方がよく報道されている。一般から抜けているからこそ面白く、読みたくなる人が多いとはいえ、このような方々の言うことを一般人が従っても同じ結果が達成できないことは当たり前である。記載されているアドバイスに同意であるかどうかはともかく、この本のように甘くないがより一般人が真似できることが書いてある書籍は確かに必要だと思う。内容に関しては読者各自が自分で考え、どのようなアドバイスが自分に合うかを考察または試せばいいのである。

LIM AN QI（マレーシア）
京都精華大学　マンガ学部　アニメーション学科　３年

ノンフィクションを読むのは初めてですが、最初がこの本で本当に良かったと思います。学生時代から退職まで様々な経験やアドバイスが語られている上に、日本社会はもちろん、国際社会で生き抜くために必要なスキルについてもたくさんシェアされているので、ありがたく思いつつ、この本を最後まで楽しんで拝見させていただきました。

私は自分のコミュ力に自信がなくて、いつも悪いタイミングで話してしまったり、必要のない内容を話して、言うべきモノを言い忘れてしまったりしてきたため、自分にとってこの本の中で印象的なのは主に「内容の発信」についてのチャプターでした。スピーチする際に固いカードの活用、メッセージの伝え方、パワーポイント作成するコツとジョークの重要性など、数多くのアドバイスや経験談があり、大変勉強になりました。エレベーター・トークの話からもインスピレーションをいただき、就活だけでなく、どの場面でも使える「20秒トーク」をちゃんと用意しようと考えたのです。そして、「外交官の特性」で言及された五つの能力は藤崎一郎さんの言う通り、誰でも身につけるべき能力です。すぐに全部しっかりと身に付けられる自信はありませんが、様々な経験の積み重ねと共に成長していきたいと思っています。

あと一年くらい経つと社会人になる私は、社会で上手くやっていけるかどうかという心配を抱えていますが、この残り僅かな時間とこの本で学んだことをいかして、どのような社会にでも溶け込められる社会人になるため、励みたいと思います！

NGUYEN BAO HUNG（ベトナム）
同志社大学　商学部　商学科　３年

藤崎一郎氏の本を読んで「もっと早く読めばいいのに」と思いました。
　この本は実践的なアドバイスが多く入っており、日本人の若者向けで書かれましたが話が具体的でわかりやすいです。藤崎氏が駐米大使の立場から考えたこと、経験したことを述べるため、内容は非常に面白くて、国際人材を目指している私にとっては大変役に立つと思います。
　また、私は今、就職活動をしており、将来どのような仕事をしたいのか、どのよう人間になりたいのか、時間をどのように管理すべきなのか、社会人になる前に何をすべきなのかをよく悩んでいました。しかし、藤崎氏の経験談を読むことにより、良いアドバイスが多く得られて問題が解決できました。さらに、学生向けだけではなく、社会人向けのアドバイスも数多く書かれているため、社会人になったらそれを仕事、生活に活かしたいと思います。
　一番印象に残っているのは「学生のアイウエオ」と「社会人のアイウエオ」です。学生のアイウエオの中に、アは「圧縮」、イは「インプット」、ウは「疑うこと」、エは「英語」、オは「思い出作りは早すぎる」ということを指します。社会人のアイウエオに関して、アは「あわてずあせらず」、イは「いばらず」、ウは「ウソをつかず」、エは「エエカッコシイせず」、オは「おこらず」のことです。このように長いアドバイスを簡潔にまとめて伝えることにより、内容が非常に分かりやすくて覚えやすいです。この「アイウエオ」をきちんと身に付けて、生活のあらゆる面で活かしたいと思います。

CHIN TECK CHING（マレーシア）
茨城大学　工学部　物質科学工学科　２年

私は「まだ間に合う　元駐米大使の置き土産」を読んだ後、モチベーションが湧いてきた。私は23歳の大学2年生なので、周りから見れば、他の人と比べて「遅い」や「手遅れ」であり、ストレスを感じていた。しかし、今、このような私でも「まだ間に合う」だと思うようになった。

本書は大きく3つのパートに分かれている。第一部、「人生のデッサンは自分で」の中から、一番印象に残ったのは学生の「アイウエオ」だった。特にアの圧縮とウの疑うことだ。実社会では重要なポイントを外さずに、最短時間で自分の主張を伝えることが重要だとわかった。それは相手の注目を引くための能力なので、圧縮する能力を磨きたい。また、他人が言ったことをそのまま受け入れず、疑って考え直すことが大事だ。これからは受け取った情報を絞り込んでいこうと思った。

第二部、「社会人ー入門から卒業」には外交官から駐米大使まで務められた経験や回顧録を通じて、仕事のあり方とアドバイスを説明してくれた。大事なポイントを見逃さないようにメモを取ることは大切だが、少人数では目障りになり、相手が話せなくなる場合があることは初耳だった。今から相手と会話しながらポイントを覚え、終了後に思い出してメモしていこうと思った。

第3部、「国際社会に出る」からグローバル化が進む時代に国際社会で活躍することの重要性とその経験から得たアドバイスを伝えてくれた。インナー・サークル入りの必要性は私にとって大変良い勉強になった。人と人の繋がりを大切にする上で、仲間外れにならないように積極的に行動したい。

経験から外務省の仕事や考え方も感じられる点が面白いと思う。現在から注目されていく4つのスキルは、データサイエンス、プログラミング、ファイナンスと英語だとわかった。4つのスキルをすべて身につけられるように大学で頑張りたい。まだ時間がある私はとにかく頑張らないといけないと思わせてもらった。

HA THI TRA MY（ベトナム）
東洋大学　経済学部　国際経済学科　２年

藤崎一郎氏の本は誰にもわかりやすくて、非常に役立つと思っています。藤崎様がおっしゃった通りで、10年間の学校よりこれからの40年間の方が重要だと考えます。やりたいことがたくさんあっても、目標に向けて今やらなければならないことを優先すべきだと分かりました。私が貿易会社に入りたいので、英語力は言うまでもなく、コミュニケーション力や創造力なども鍛えたり必要な資格を取得したりする計画を立て、早めに実践しようと思っています。また、藤崎様の大使館勤務について読んだとき、子供の頃には私も大使館で働きたかった、外交官になりたかったなあと思い出しました。様々な国に行けて、国際交流などが行え、国と国の繋がりが深められる仕事だと思っていました。藤崎様の本を通じて、初めての大使館勤務や外交官に望まれる能力など、この仕事について詳しく知るようになり、今でも憧れています。特に、『まだ間に合う』に書いてある全てのアドバイスが学業にも仕事にも人生にも役立つと思います。記録とりのコツ、英語のレベルを上げる方法、英語速読習得方などを学びました。これから日本語ばかりでなく、英語で行われる講義にも参加しますので、大変参考になりました。その他、歴史や政治や経済などについても書いてあるので、幅広い知識が得られました。最後に、「自分の将来を考えて拓くのは自分だけなのです。」という文が最も印象に残りました。日本に留学している私が既に国際社会に入って、今後より頑張りたいです。藤崎一郎氏の本を読んで本当によかったと思っています。

LEON ADITYO HARTANTO（インドネシア）
明治大学　理工学部　応用化学科　２年

この新書は人生における大きな出来事に基づき3つの部分に分けられ、学生時代、社会人時代、と国際社会に入る時代となる。その３つの時代の共通点は時間が限られていることだと思う。現在の地球で一日は24時間しかないので、時間の使い方によって一人の出世が決まっていくだろう。確かに例外な者はいるはずのだが、それは極わずかな人たちである。

結論から言うと、教育の時期は短いので、藤崎氏はいくつかのコツを教えているが、私は10対40と学生の「アイウエオ」に感動した。我々、学生の時期は大学入ってから長くても10年間（博士まで行くとしたら）、その後は40年間労働者として、社会に貢献しなければならないという事実がある。この時期はあという間に終わってしまうので、優先順位を決めなければならない。部活やサークルは確かに人脈を増やすことにとても役に立つが、すべての時間を懸ける場所ではないと思う。この部分から刺激を受けたので、これからは勉強などをもっと高い優先順位にしようと思っている。　社会に出るときの必要なスキル、Data scienceやprogrammingの技術を身につけたほうがいいと思われる。そのあと、学生生活を歩むときに「アイウエオ」を忘れないで自分の目標に向かうということに賛成した。日本では学生時代は思い切り楽しんでいる人がほとんどだと思われる。これは悪いことではないが、思い出を作るよりスキルを身につけたほうが社会人になったら役に立つと思っている。

留学生は社会人だけではなく、国際社会と接することが多いため、その基礎の知識を知ることが大事だといわれる。まずは、どこに行っても通じる言語を習得しなければならない。今までは英語が代表だが、将来的に考えると英語だけではなく、中国語とスペイン語を身につける必要がある。さらに、藤崎氏の言う通り、プレゼンなどをする時や何かをアピールする時は簡潔に伝えることが重要であり、そのスキルは国際社会に出る際に最も大事だと思われる。

MAHESA PAMUNGKAS SUGIHARTO（インドネシア）
明治大学　経営学部　経営学科　２年

藤崎一郎氏が書いた本について非常に興味深いと思う。本の初めに書いてある通り、この本は著者の失敗が書いてあって、どうして失敗したのか、失敗から何を学んだのかを本音で書いてあった。今まで読んできた本の中で、このような本を読んだことはなかった。 目次に目を通したら、本当にどの部分でも勉強になるような内容で、読んだ後はやはりとても人生の勉強となり、読んで良かったと思う。個人的にとても興味深く、最も印象に残ったのが、最初の方の「人生のデッサンは自分で」というテーマの内容だった。特にサブタイトルの「だれの人生」という所が非常に共感している。 「だれの人生」の中の様々な言葉に共感できた。頭に「自分の人生ですから自分で設計するのが当然ではありませんか」という言葉があるが、これはまさにそうだなと思う。私の国では大学や学部を選ぶ時に、自分が学びたい学問を選択するのではなく、親が勉強して欲しい学問を選択しがちである。これによって大学を卒業して後悔してしまう人が多く、大学時代を繰り返したいなと思う人がいる。 自分の人生を他人で設計してしまうのは悪い事だと私は思う。たとえ親でも、自分の人生を設計するのは自分だ。ただ、人生設計に親はアドバイスをしたり、選択肢をあげたり、カウンセラーのような役割を持っていると考える。が、最終的にどういう人生を歩むのかは自分が選ぶのだ。自分の人生を他人に任せてしまうと後悔したり、病んだりしてしまう事があるだろう。よって、私はこの本にある「自分の人生ですから自分で設計するのが当然ではありませんか」という言葉に共感している。 もちろん、これのみならず、例えば、「時間管理を覚える」、「英語は道具」、「外国人との付き合い方」や「人と人の繋がり」なども他にいい項目はあり、本当に勉強になるような内容がたくさんあった。しかし、私にとって大きく自分の人生に役に立つ項目としては「人生のデッサンは自分で」という項目だった。

ALFRED NGU YOK FEI（マレーシア）
法政大学　生命科学部　応用植物科学科　２年

本書では藤崎氏が学生と社会人であったときの経験を中心に、社会人向けのアドバイスが多く書いています。実際に現在役に立っているアドバイスもあります。 私は藤崎氏の学生向けアドバイスにほぼ同感です。学生時代は思い出づくりの時期ではないと述べた藤崎氏の意見は私にとって新鮮であり、この意見に出会ってよかったと思います。大学時代は勉強を中心に、遊びはほどほどにすることの大切さを知りました。 また、私は大学生ですが、アルバイトをしているので、社会人向けのアドバイスをサラッと読んでみました。その中で共感できた、勉強になったアドバイスも色々あります。藤崎氏の述べた通り、仕事で焦りの感情が頻繁に表に出ると信頼されにくいものです。私はアルバイトの勤務中に、気持ちの動揺を隠し続けてみたら、もっと多くの作業を先輩に教えてもらったり、さらに信頼されるようになったと実感しています。つまり、この本は実践的に役に立ち、今後の人生にも活躍し続けると考えます。 一方で、内容の豊富さはいいですが、第2部は中盤に入ると専門用語がたくさん出てきて、調べないとなかなか理解できない内容が多いです。あまりにも私の理解が遅くて、知らない用語がいっぱいあるページには太字だけを読み、中身を飛ばしました。一応社会人向けの本でもあるので、学生にとって理解しにくいところがあるのもおかしくないと考えます。ですので、社会に出て、知識を身につけて機会があればまた読もうと考えています。

NATHANAEL IAN GUNADI（インドネシア）
青山学院大学　理工学部　情報テクノロジー学科　１年

私は藤崎一郎氏が話していたことにほとんど賛成しています。物事の簡潔化であったり、国際的や将来的な考え方を持つ大切さであったり、社会人がとるべき態度であったり、どの世代ににとって大事なことが数えきれないほど書いてあります。私が最も好きな部分は本の最初に書いてありますが、それは人生を一回しか見られない映画としてたとえることだという文でした。もちろんだれでもつまらない映画よりも面白い映画を見たいでしょう。そして失敗は自分しか送ることのできない人生の一部にすぎません。主人公である自分はきっと乗り越えるはずだと思うのが重要だと思います。

英語とコンピュータの大切さも何回も取り上げられましたが、そこで私は疑問というか、不満というか、複雑な気持ちになりました。英語は確かに重要です、それを否定することができません。しかし、コンピュータになると話が別だと思います。コンピュータについて勉強するのは決して楽なことではありません。働けるようになるまで長い時間をかけて勉強する必要があります。そして、求められている最低限の知識も20年前と比べたら大幅に増えました。近年の様々なデータベースやインターネットの進化からすると誰でも同じ結論にたどり着くことができるでしょう。ですから学生にコンピュータ系の勉強をさせたいのであれば（働けるようになる技術を身につくまで勉強し続けると想定すれば）、週何回も授業を受ける必要があって結局部活の活動を減らすことで得られた自由時間もなくなるでしょう。私は自由時間を使って、日本語、プログラミング、ボクシングなどを学びました。妹も服のデザインを自分で学んでいます。ですから、私は自由時間の大切さをよく知っています。しかし、誰でもプログラミングに向いているとは限らないと思います。学生に新しいことを学ぶ大切さを教えながら、好きなことをさせたほうがいいと思います。なぜなら好きなことをしたことで、そのことにはだれにも負けない学生が必ず現れると信じているからです。

LAI QING LONG（マレーシア）
東洋大学　国際学部　国際地域学科　１年

藤崎一郎氏の本はとても面白かったっです。そして、大学生に役立つ知識がたくさん書かれています。難しい漢字が多かったので、辞書を調べながら読んだら、自分の語彙量も増えた気がします。また、自分の成功したところだけでなく、失敗した経験についても触れてくれたのがよかったと思います。そして、この本を読むことで、社会に出る際に役立つポイントなども学ぶことができました。また、本の中で一番好きで重要だと思うのは「慌てず焦らない」という言葉です。自分的にはやはりどんな場面においても、冷静を保つことが一番大事だと思います。平然と危機に対応できると周りからもより信頼を得られるのでしょう。藤崎一郎氏は外交官という職業の処し方を通じて自分の人生経験や正しい生き方などを教えてくれました。どんな困難に遭っても、頭で考え続けることを忘れず、いろいろな視点から解決策を考えることができれば、ひとは必ず成功します。そして、自分が諦めない限り、人生には「もう遅すぎる」はありません。

ANDREW LIM KAR JUN（マレーシア）
山形大学　工学部　情報・エレクトロニクス学科　１年

藤崎一郎氏が書いた「まだ間に合う」を読み、私は自分の将来の進むべき道についてさらに理解が深まった。この本のタイトルの通り、著者から過去にどんな失敗や過ちがあっても、今から努力すれば自分の未来は自分の手で変えられるという精神が強く読者に伝わってくると感じた。この本には、多くのアドバイスや著者の経験則が書かれて、著者の成功談だけではなく、失敗談も含まれているから、将来に迷う自分にとって、この本は非常に役に立つのだ。　また、社会人の「アイウエオ」の「ア」が私の欠点だと気づいた。なぜなら、私は与えられた課題を解決するとき、状況が思い通りにならない場合、焦ることや慌てることがよくあるからである。この欠点を改善するために、この本に書いてある選択肢を考える練習が必要である。各オプションの得失を考えて、いくつかの解法を導き出すという思考法が重要だ。状況は思い通りにならなくても、ほかの解法を準備しておいたら、焦ることや慌てることは回避できる。私は社会人になる前にこのスキルを身につけたいと思っている。　最後に、この本を読み終わって本当に良かったと思う。この本を読んでいる途中、見たことがない漢字やカタカナが数多くあった。よって、私は辞書で知らない単語を調べながら、この本を読むことにした。読む時間が長くなったが、そのおかげで、自分の語彙量がかなり増えた。「人の振り見て我が振り直せ」や「他山の石」のようなことわざの意味も理解できた。留学生の自分にとっては良い経験だった。

LEE ZEE YEEN（マレーシア）
長崎大学　多文化社会学部　多文化社会学科　１年

政治に関する仕事をしたい私にとっては、藤崎さんの本を読んで、たくさん勉強になりました。藤崎さんは本当に素晴らしい人だと思います。私はこの本の100%を理解できたとは言えないですが、この本を書いた人の経歴と人生への姿に感心しています。「この本を読んであなたの人生に役立つことがあるか」と聞かれたら、内容だけではなくて、ノートの書き方や上司への話し方などでもなくて、著者の仕事への熱心さと態度が私にとっては励ましです。「藤崎さん欲望がありませんか」と聞きたいです。私は人生の目標を確かに持っていますが、初めての大学生活すなわち最後の大学生活なので、社会人になる前の青春にいい思い出を作れるように、勉強したり、遊んだり、旅行したりしたい欲望が多いです。社会人になった後でもこの世界と社会の面白さと多様性を探索したいです。藤崎さんの経歴と実績を読むと、「すごいなぁ」と思ったけど、毎日慎重で注意深くの仕事や生活を過ごすのは大変ではないかと思います。私は自国の民族の現状を改善する目標があります。しかし目標と考えだけを持つだけでは足りないことがわかりました。自分の考えを伝えて、計画を推進するために、藤崎さんが書いた社会人のあいうえお、仕事のコミュニケーションのスキルなども身につけなければなりません。最後に、藤崎一郎氏の本を読むことで、今までの生活と学習態度をよく検討しました。今は目標達成するためいい方向を向いていると思います。

〒104-0031 東京都中央区京橋2-2-1 京橋エドグラン18F
ＴＥＬ：03-5656-5297　ＦＡＸ：03-3516-6261
URL: http://semmoto.or.jp/

ニュースレター　No. 7
編集：千本財団事務局
発行：2022年11月